

超鳥戦隊ガйнаバード

その一員女鳥ヒナ  
またの名を「ガйнаピンク」

人類奴隷化計画を遂行する  
悪の組織「リツガー」と戦う  
ガйнаバード達



ガйнаピンクはリツガーの  
アジトに関する情報をキャッチ  
別任務に当たる他メンバーに  
代わり、独自に捜査を行っていた…

「が…ガハっ…」

「ガハハハ！愚かなガイナピンクよ！  
まさかこうも簡単に偽の情報に踊らさ  
れてくれるとなは！」

「私とした事が…」  
(もう……意識が……)

「ガイナピンク、今日は  
貴様が我らリックガーの奴隷  
となる記念すべき日だ！」



「こ…ここは…」

「我々のアジトへようこそ  
ガイナピンク！  
これから貴様奴隷としての  
調教を行う！」

「何ですって…！」



「ガイナピンクが我々の元に  
降ればリッガーにとって大きな  
躍進となるだろう」

「くっ…誰がアナタ達の手先なんか…」

「手先？何を勘違いしている？  
貴様になるのは奴隷は奴隷でも…」

「性奴隷になるのだ」





「オラオラ、どんな目に合うか  
理解したたる？」

「や…やめなさい…!!  
そんな汚らわしいもの!!」



「ああ？何が汚らわしいって？」  
 「うっ！く、くさ……っ！」  
 やめなさい！やめて！」

ヌトヌト...

「ああ？何が汚らわしいって？」  
 「うっ！く、くさ……っ！」  
 やめなさい！やめて！」

又ト又ト又ト...

「ああ？何が汚らわしいって？」  
 「うっ！く、くさ……っ！」  
 やめなさい！やめて！」

又ト又ト又ト...

「……おっ……おっ……おっ……おっ……おっ……」

「……おっ……おっ……おっ……おっ……おっ……」

「……おっ……おっ……おっ……おっ……おっ……」



「ほおら」「それでも食らえ」  
「おぶっー!」

ドッ

ズルルル

「うおおお…おえええええ…!」

「ガハハハ! 良い気味だ  
ガイナピンク! さあ調教を  
開始するぞ!」

ドロオオオオ……

「はあ…はあ…精液の臭いで  
気が遠くなりそう…」

「ただどこがアジトなら  
隙を見て脱出すればガイナーダの  
みんなにアジトの位置の情報を  
伝える事ができる…」

「ハムは何とか耐えて…」



「さあて早速ぶち込んでやるか」

「なにちょ、ちょっと…」



か

「や、やめなさい！そんな所…」

「綺麗な色をしてるな！  
ガハハハ！ブチ犯し甲斐が  
あるってもんだぜ！」



「たまらねえ…挿入するぜ」

「ま、待って！まだ準備が…」



「んんーんあああああああ！」

「どうだ人間が受け止めるには  
ちよっとデカすぎるだろ？」

「太すぎ！太すぎるから！  
こんなの…無理いいいいい！」

「叫ぶ度に締めりが良くなってるぜ  
どんどん奥に入れていくぜ」



「はあああああああ！  
奥！奥まで入ってるううう！」

「おお…すげえ絡みついてくる膣内だ…  
ガйнаバードの力か？  
動くからガйнаバードの力で耐えてみるよ」

「う…うぐうう…私は…  
ガйнаバードは…負けない…！」



「おう♡おう♡お♡お♡お♡お♡お♡  
お腹の中っ！えくれるうう♡」

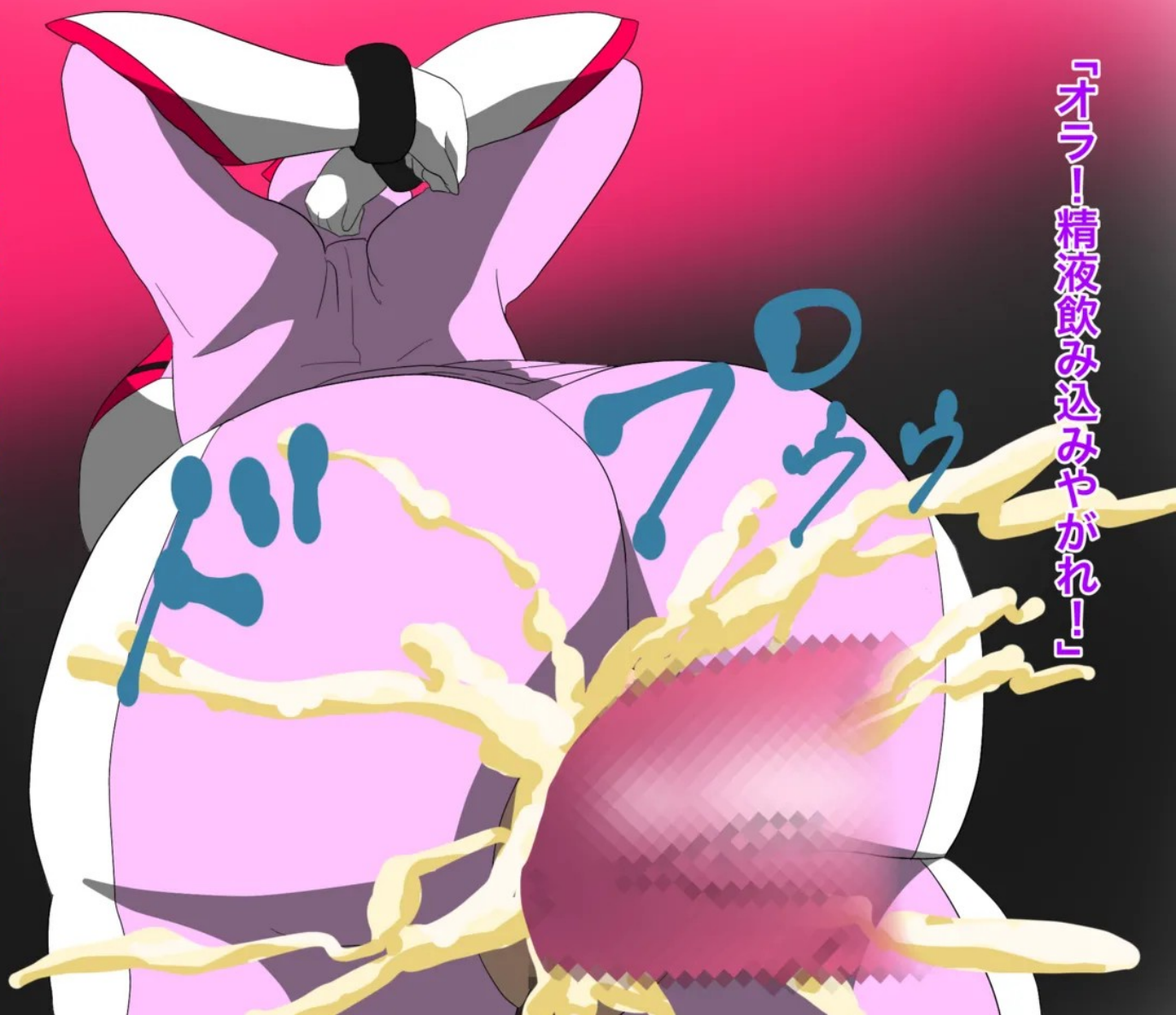
「ガハハハ！速攻で情けねえ声  
出してんじゃねえか！  
だらしねえぜ、ガイナバードの  
名前が泣くぞ？」

「おおおお♡おお♡おおおん♡  
ガイナ…バード…は……♡」



「オラ！精液飲み込みやがれ！」

「負けなああああああ  
ああああああああん♡」



「あああ♡お腹が…熱い…！  
ドクドク出てるぅ……………♡」

「ああ〜射精止まらねえ…  
名器すぎるだろ…」



「ガイナピンク、絶対お前は  
性奴隷に堕としてやるぞ…」

「はあ…はあ…やれるものなら…  
やって…みなさい………」

「流石ガイナバードの一員だ  
威勢がいいじゃねえか」



「単純にブチ犯すだけじゃ  
屈服しねえようだな」

「当たり前よ！  
私は訓練を受けた戦士  
なんだから！」

「戦士ねえ…だからこそ  
屈服のさせ甲斐があるよな？」



「屈服なんてしないと  
いうでしょう！  
どんな責め苦にも  
耐え切ってみせる！」

「おうおう、ところでこのマスク  
バイザーを開けるスイッチはここ  
だったよな？」





「さつき俺の精液の臭いで  
吐く程悶えてたよなあ？」

「ちゅっど…まっか…」





「いやあああああ！」



「お...おぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ...」♡

トビ

ボム

ル

ル

ル♡

ビュ♡♡



「!? バイザーシャット」

キ

ニャ

アッ...

アッ...

「ガハハハ！吐く程臭い俺達の精液！！飲み干さないで窒息するぞ！！ガイナピンク！！」

「んん！んんおおおお！んんんん！んんおおおお！んんんん！」

八

ハタハタ

「んおお……おっ……つぶ……」

「お！飲み干したのか？  
やるじゃねえかガイナピンク」

「お……おええ……おええええ……」

「催淫効果のある俺たちの  
精液を飲んだんだ！  
夕夕じゃすまねえぜ？」

「え……」



「は……はへえ……♡  
お……お……♡」

「早速効いてきたな？  
それじゃあ引き続きフチ犯して  
やるとするか！」

ゴボボボボボ……



「はあ……♡はあ……♡はあ……♡」

「覚悟はいいかガイナピシク  
普通の人間じゃ満足できねえ  
ようにしてやるからな」



「んほおおおおおお  
おおおおおおお♡」

「ガハハハ！どうだ！  
アナルに俺のデカマラは  
効くだろお？」

又 又 又

又

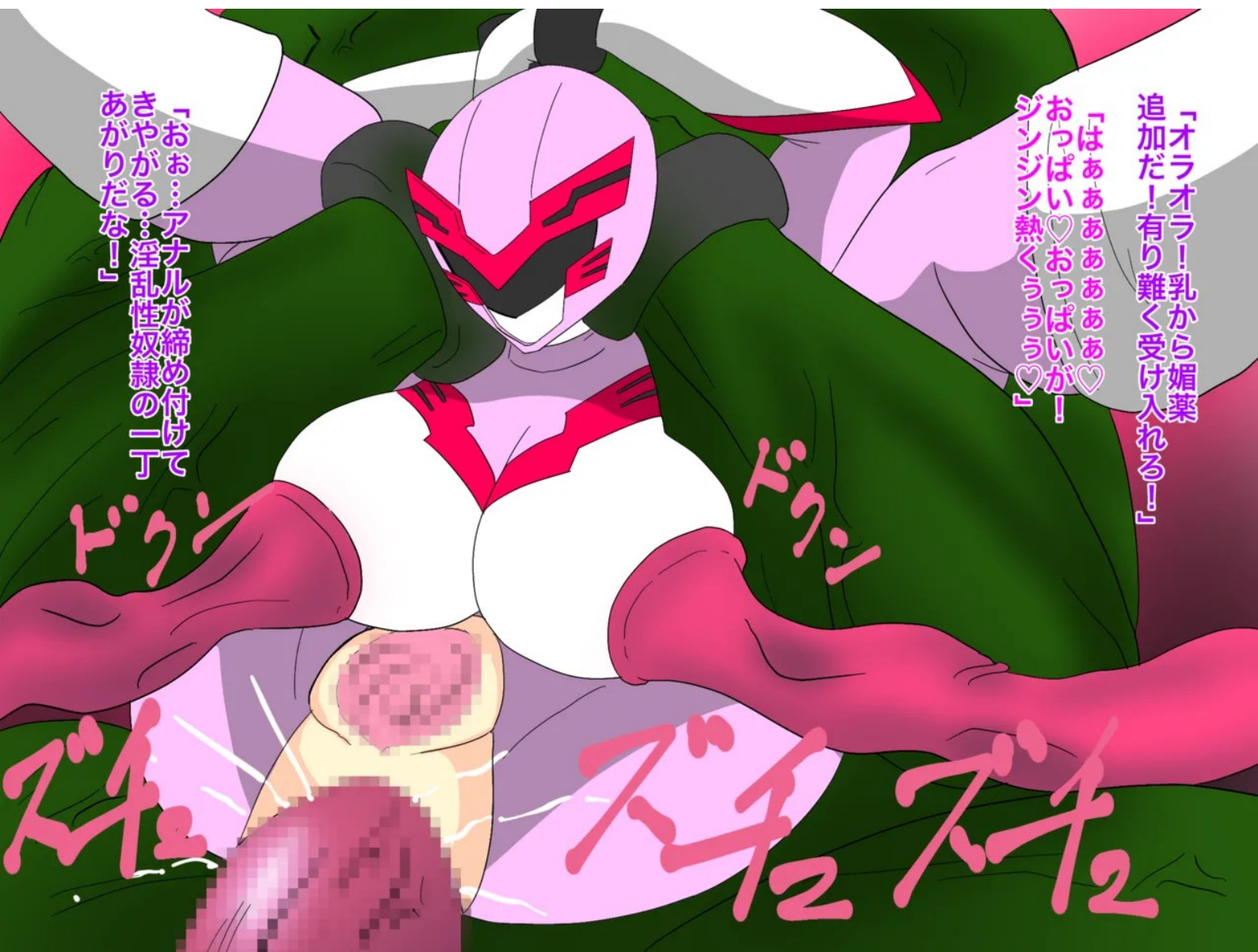


「んおっ♡んおっ♡んおっ♡  
ふ♡太♡ふ♡ふ♡ふ♡ふ♡ふ♡  
ふ♡の♡お♡お♡お♡お♡お♡  
「もう殆どトんじまっでんじゃ  
ねえかあ!?他愛もないぞ  
ガイナピンクよお!」

「オラオラ！乳から媚薬追加だ！有り難く受け入れる！」

「はあああああああ♡おっぱい♡おっぱいが♡ジンジン熱くううう♡」

「おお…アナルが締め付けてきやがる…淫乱性奴隷の一丁あがりだな！」

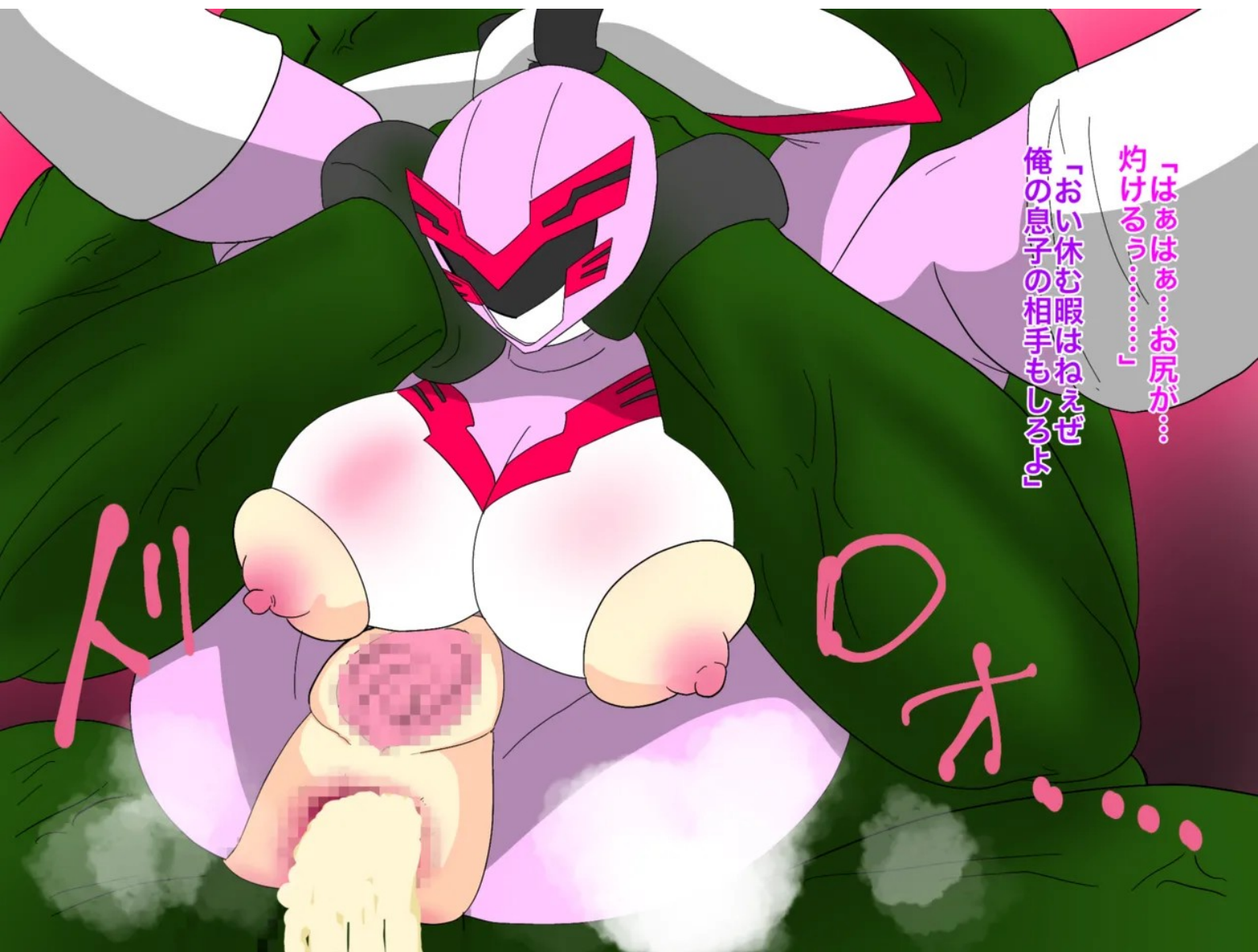


「いい格好だなガйнаピンク!」

「もっととおお♡もっと気持ちよく  
なりたいのとおお♡おお！  
もっとハメてえええええ♡  
熱いの出してええええ♡」

「いいぜ…だったらお望み通り  
熱いのでくれてやるよ！」





「はあはあ...お尻が...  
灼けるう.....」

「おい休む暇はねえぜ  
俺の息子の相手もしるよ」



「あはーあはーあはあはあはー」  
「ガハハハ！我慢できねえか！  
お前のモンでガイナピンクを  
壊してしまえ！」



「あはーあはーあ……  
おお………」

「んああああ………」♡



「おおおおおおおおおお  
あああああああああああ  
「んはあああああああああ  
あああああああああああ♡」

ホッ  
と

「ああああああああああああああああああああ！  
おおおおおおお！おお！おおあああああ  
あああああああああああああああ！」

「んは！あああ！んあああ！  
うあああああああああああ！  
あああああああああああ！」

「ガハハハ！二人とも何て  
声を上げてやがる！まるで  
獣じゃねえか！」





「きょおおおおおおおおお  
おおおおおおお—」

「あああああああああああ  
あああああ♡♡♡♡♡」

「あ…はあ…もつと…もつとお…」

「ガハハハ！すっかりただの  
ザーメンタンクになったのだ  
おめでどう！夢の性奴生活  
のスタートだ！ガイナピンク！」



ん

オオオオ

「おらガイナピンク！  
我々リツガーへの忠誠を  
宣言する！」

「はい♡私女鳥ヒナこと  
ガイナピンクは♡  
ガイナバードを除隊し♡  
性奴隷としてリツガーに♡  
永久の忠誠を誓います♡」

ズキズキ

「オラ！性奴隷の証だ！  
受け取れ！ガハハハハハハ！」

「んあああああ！  
イグ♡いっぐうううう♡  
いぎぎすううううう♡♡



「ガイナピンクはリッガーの手に  
堕ちた！このまま全人類を奴隷に  
してやるぞ！覚悟しろ愚かな人類！  
ガハハハハハ！」

「はい…人類も私も…  
リッガーのモノです…♡」



